

実証実験の実施内容について

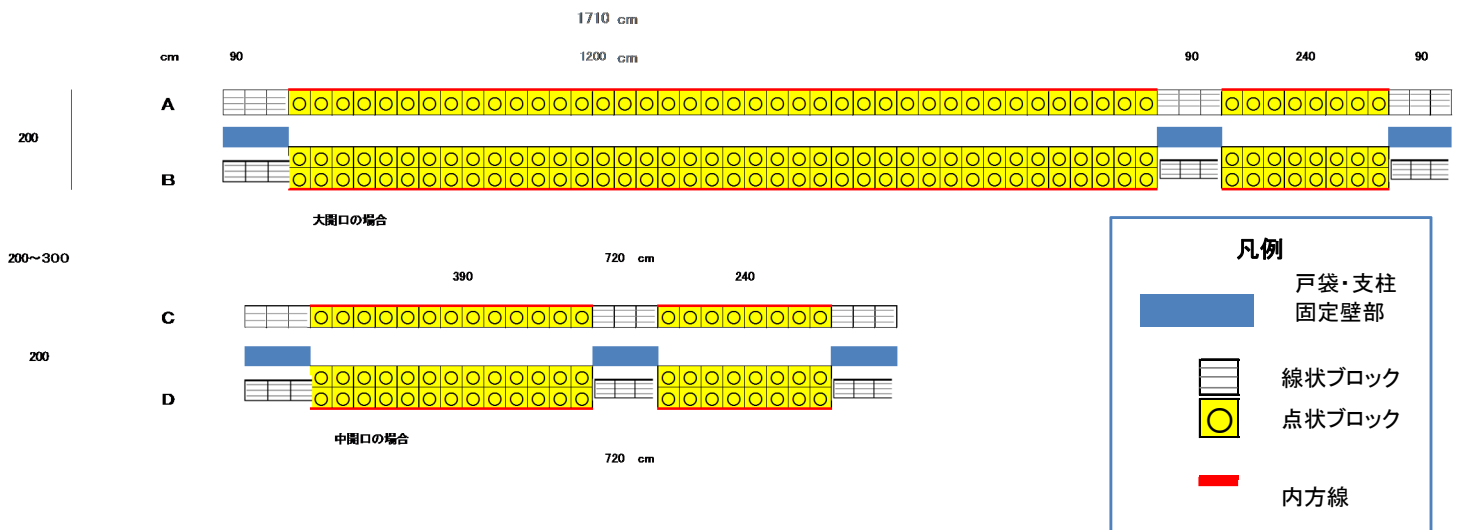
1. 検証するホームドアの形式

- 1) 大開口：12mで実施、筐体部は3か所の仮設（開口部2か所）
- 2) 中開口：4mで実施、筐体部は3か所の仮設（開口部2か所）

2. 敷設パターン

- 1) 開口部の点状ブロック1枚敷き（敷設奥行き30cm）
- 2) 開口部の点状ブロック2枚敷き（敷設奥行き60cm）

※2枚敷きの際、線状ブロックのホーム内方側の突出しに関しては、40cm突出しの案と25cmの案が存在したが、両者の一対比較の結果25cmの評価が高かったことから、25cmのパターンで実施することとする



離隔距離は、筐体部からの線状ブロックの距離を15cmとする。

3. 確認項目

- ・1枚敷きと2枚敷きのどちらが適切か
- ・大開口と中開口での違いがあるのか

4. 評価方法

白杖の使用、歩行パターンは通常通りとし、「辿りづらいホーム柵」の場合の歩き方として評価をしてもらう。

- ①長軸方向に歩いて開口部もしくは筐体部を見つけやすいか（1枚と2枚で差があるか）
- ②長軸方向を歩行する上で方向を見失う不安があるか（1枚と2枚の違い、開口による違い）

5. 実験方法

1) 実施日程

8月下旬～9月上旬 平日休日計6日（仮設、撤収日含む）

調査員2名で実施 待ち時間を減らし、1日9本を9:30～18:30に実施
1本（説明30分+実験40分）

2) 実験時の情報提供・手順

＜事前説明＞ 集合説明 30分

ア 各種視覚障害者誘導用ブロック（点状、線状、内方線）の説明を行う

イ 被験者へホームドアのあるホームの利用経験の確認及び、各種ホームドアの説明

ウ 被験者へ視覚障害者誘導用ブロックの普段の利用方法を確認

＜実験＞ 一人ずつ 40分

【体制】 1人の被験者に対し、インタビュアー1名、ビデオ1名

×同時に2組実施体制（大開口の部屋と、中開口の部屋を分ける）

説明員1名（別室）

アテンド（送迎ほか）1～2名 計6～7名

ア 敷設パターンを歩きながら説明 5～10分

イ 中開口実験

長軸方向に2パターン歩いて 10分

Q1-1 開口部はどちらが見つけやすいですか 1、2、どちらでもない

Q1-2 見つけやすさはどのくらいですか

1とても見つけやすい、2見つけやすい、3どちらともいえない、4見つけにくい、5とても見つけにくい

Q2-1 線路と平行に歩くときにどちらが不安を感じましたか 1、2、どちらでもない

Q2-2 不安はどのくらいでしたか

1とても不安、2不安、3どちらでもない、4不安はない 5全く不安はない

Q3-1 総合的にどちらが好ましいですか 1、2、どちらでもない

好ましさはどのくらいですか

1とても好ましい、2好ましい、3どちらでもない、4好ましくない 5全く好ましくない

ウ 大開口実験

長軸方向に2パターン歩いて 10分、

Q1-1 開口部はどちらが見つけやすいですか 1、2、どちらでもない

Q1-2 見つけやすさはどのくらいですか

1とても見つけやすい、2見つけやすい、3どちらともいえない、4見つけにくい、5とても見つけにくい

Q2-1 線路と平行に歩くときにどちらが不安を感じましたか 1、2、どちらでもない

Q2-2 不安はどのくらいでしたか

1とても不安、2不安、3どちらでもない、4不安はない 5全く不安はない

Q3-1 総合的にどちらが好ましいですか 1、2、どちらでもない

好ましさはどのくらいですか

1とても好ましい、2好ましい、3どちらでもない、4好ましくない 5全く好ましくない

Q4-1 どこから不安になりますか。不安になったところでとまってください

開口部スタートからの距離を測る（ブロックの横方向（目立たないように）に距離を記載）

+すべての設問で理由を聞く

エ ヒアリング等 10分

計 40分

6. 被験者

① 想定すべき対象者

- ・視覚障害者誘導用ブロックの敷設方法のための調査であるが、視覚障害者の転落防止を第一義として、全盲者、ロービジョンの方を対象に検討する。
- ・誤認識なく転落防止につながる適切な敷設方法を検討するため、全盲の人がブロックの敷設パターンを認識できることに加え、ロービジョン者等が残存視力による誤認識で転落することのないように検討を行う。

② 被験者の条件

- ・全盲（両足の足裏利用者、片足、視覚障害者誘導用ブロックは頼りにしない人（白杖等）
- ・ロービジョン（光覚弁、手動弁、指数弁程度）
- ・盲導犬利用者
- ・単独歩行ができる人、公共交通を単独で利用することの多い人
※通常通りに歩行してもらった上で、転落リスクを想定して検討する。

③ 被験者人数案

前回調査の際、重要な分析軸である「歩行の手がかり」の人数が少数になるところがあったことを踏まえ、対象者を選定する際に記載いただいた上で選定する。

下記のほか、内方線、白杖と視覚障害者誘導用ブロック、視覚障害者誘導用ブロック以外（白杖、壁など）、補助犬利用等を確認し、選定条件としては、年齢や男女よりも優先事項とする。

視覚障害の度合	歩行の手がかり	人数
全盲	両足をブロックに載せて歩行（白杖等と併用含む）	15
	片足をブロックに載せて歩行（白杖等と併用含む）	15
	白杖のみ（参考）（ブロックをメインで頼りにしない）	5
	盲導犬（参考）（ブロックをメインで頼りにしない）	5
残存視覚（ロービジョン）	※前回長い距離での2枚敷きへの不安視が多かった	10
計		50

④ 被験者に確認する事項

年齢、性別、視覚障害の度合、単独外出の度合、単独鉄道利用の度合、歩行訓練有無、失明時期（中途・先天）、視覚障害者誘導用ブロックの踏み方、歩行時の手がかり、ホームドア利用経験の有無、種類、経験数（頻度）等。

⑤ 被験者の公募方法

当事者団体を通じて、声掛けを依頼（日盲連、弱問研、JRPS、鉄道ホームその他）
本人より事業事務局へ応募いただき、プロフィールも提出いただき、選考

7. 実験場所 文京区内オフィスビル

●場所の選定条件

- ・夏の調査につき、集中豪雨、猛暑を避けるため屋内が望ましい
- ・12m大開口の実験が必要。(鉄道総研ではスペース的に困難)
- ・1週間程度の場所の確保が必要
- ・厳密なブロックを埋め込む仮設には1設備あたり数百万円の経費が必要で本事業では不可能
- ・日程的にも1週間で予算内で抑えられるところが極めて少ない
- ・貸しスペースで床材がカーペット以外のところ(タイル、リノリウム、フローリング)は極めて少なく、予算、期間等で条件をクリアするところはない

●本実験場所の選定理由

- ・都心でアクセスしやすい
- ・天候に左右されない屋内で、広いスペースがとれる
- ・日程確保がしやすい

●課題

- ・床材がカーペット

●課題解決方法

- ・元来、埋め込み実験は上記理由につき不可能なので、そもそもブロックの有無を確認する実験はできない(×検知したら止まってください ○どちらが安心ですか)
 - ・触感、コントラストなどが実際の鉄道ホームとは大きく異なるので、通常のホームを再現する意味合いの強い実験は行わない
 - ・今回は点状、線状、内方線付といった敷設方法を選択する実験に限定する
- ⇒以上を前提としての実験を行う



約 20m × 12m 程度の部屋 (大開口用)



6m × 12m (中開口用)

8. 実験調査票

質問、説明方法等を記載、回答用紙とセットで作成する。

※その他、リスクシナリオ分析、実現可能性調査等の結果において、確認が必要な項目がある場合は適宜検証項目の追加を検討する。